

「フィロクセノス」

近藤 節夫

もう40年も前に作家小田実の「何でも見てやろう」を読んで、海外ひとり旅にメロメロにはまりこんだ。小田の生き方と行動力に惹かれたわたしの行動には、いつも小田の姿が重なった。アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、そして戦時下のベトナム、戒厳令下の中東諸国への旅は、いつも小田のイメージがまつわりついていた。ギリシャへの関心も「古代ギリシャ語」を研究していた小田の書に触れるまでは、通り一遍のものだった。感性の高い小田が、「ヨーロッパで最も感動したのは、アクロポリスの丘だった」と絶賛した古代都市への旅は、ようやく4年前実現した。そのアクロポリスの周囲を舐めるように歩いた。憑かれたように歩いているわたしに、地元の人たちが寄ってきてガイド役を買ってくれた。熱心なガイドパフォーマンスは、わたしに小田が述べていた「フィロクセノス」というユニークな言葉を思い出させてくれた。「フィロクセノス」とは、なんと「外国人好き」という意味だったのだ。なるほど小田も感心したように「世界各国のひとびとのなかで、ギリシャ人ほど客好き、外国人好きの国民はないと思う」。それが、ギリシャ人が世界で唯一ただ一語で「外国人好き」という意味を言い表す言葉をもつにいたったいわれなのである。

わたしは翌年もまた、ギリシャへ出かけた。予期していたように、あっという間に「フィロクセノス」のギリシャ人に取り囲まれてしまった。